



監督＝ロバート・ベントン／脚本＝ニコラス・メイヤー／原作＝フィリップ・ロス／出演＝アンソニー・ホプキンス／ニコール・キッドマン／ゲイリー・シニーズ（ギャガ・ヒューマックス共同配給／2003年アメリカ映画／108分）

人は誰でも秘密をもつもの。そして同時に、その秘密を打ち明けることができる相手を求めるもの。アンソニー・ホプキンスとニコール・キッドマンが繰り広げる、静かだが圧倒的な迫力の演技は、人間の本質に迫る見事なもの。「ハリウッド的大作」とは全く異質の名作だが、テーマが重すぎるためか、客の入りはイマイチ。それにしても、『白いカラス』という邦題のつけ方には大いに感心……。

## 🎬 新聞紙上は絶賛の嵐だが……？

この映画は、アンソニー・ホプキンスとニコール・キッドマンという2人のアカデミー俳優が登場し、現代アメリカ文学の世界でノーベル賞候補に挙がる、作家フィリップ・ロスの『ヒューマン・ステイン』を原作としたもの。そして、アメリカの根深い人種問題に焦点をあてて人間の本質に迫った映画、ともなると「人気騒然」となってもおかしくないはずだが、意外にそうではない。

新聞紙上では数々の著名人が、ひとくちコメントを寄せて絶賛しているが、これを上映する映画館は、比較的少ない。これは、同じくニコール・キッドマン主演の『ドッグヴィル』（03年）でも同様だった。これは、『ロード・オブ・ザ・リング』『キル・ビル』『マトリックス』等のハリウッド大作を、一挙に多数の映画館で上映し、一挙に多額の興行売上げを競うという、最近の営業方針の現れだが、私にはどうも納得のいかないやり方。私がこの映画を観たのは平日の晩7時からだったが、この「名作」への観客の入りは少なく、席はガラガラ状態。これ

には少しビックリするとともに、日本人の観客のレベルに少しガッカリ……。

## この映画の主役はコールマン教授

この映画は、コールマン教授（アンソニー・ホプキンス）の親友ネイサン・ザッカーマン（ゲイリー・シニーズ）の言葉による回想というスタイルをとっている。そこで最初に語られるのは、「これはコールマン教授に関する物語である」というもの。つまり、この映画はコールマン教授を主人公とし、その人種問題をテーマとして描くものだ。

コールマン教授は、アメリカ・マサチューセッツ州の名門アテナ大学の学部長をつとめているが、ユダヤ人としてはじめて、古典教授の地位にのぼりつめた権威ある学者。ところが、コールマン教授がその講義で、授業に出席していない学生を「スプーク」と表現したことがきっかけで、大学教授を辞職せざるをえない事態に追いこまれていった。「スプーク（spook）」とは、第1義は「幽霊」だが、第2義は「諜報員」や「スパイ」。要するに、黒人への差別用語というわけだ。そのショックで、妻も倒れ、あっけなく死亡。

## 親友ネイサンとの不思議な心の交流

そんなコールマン教授が、なぜか無二の親友となったのは、「数年前、私は前立腺ガンになった。治療はうまくいったのだが森に逃げ込み、日常のしがらみをすべて絶った」と語り、湖畔で隠遁生活を送っているネイサン。

2人の出会いのきっかけは、コールマン教授がネイサンに、自分が大学教授の職と妻を失った不条理な物語を本に書いてくれと、依頼したこと。ネイサンは、「自分で書いたら……」とやんわりこれかわして断ったが、こんな会話の中、2人之间には不思議な男同士の友情が……。これは、お互いがもつ「失意の過去」という共通点によるものだったが、深まる2人の心の交流の中で、それぞれが自分の生活を取り戻していった……。

## ニコール・キッドマンの登場

コールマン教授とフォーニア・ファーリー（ニコール・キッドマン）との出会

いは、全くの偶然。そして、車の故障で立ち往生していたフォーニアをコールマン教授が見つけたのも偶然。そんな1回目の出会いだけで、家までフォーニアを送って行ったコールマン教授に対して、フォーニアがかけた言葉は、「寄ってく？ ねえ、言っとくわ。同情が欲しいなら、他を当たってね。私は同情しない」という刺激的なもの。

この言葉にとまどい、いったんは引いてみたものの、やはり年はとってもそこは男……？ 郵便局につとめ、大学の掃除婦をやり、さらに牧場の仕事をこなしながら、1人ひっそりと生きているこの魅力的な若い女性に興味をもち、魅かれていく自分を、コールマン教授は自制することはできなかった。そして、そのまま2人は激情のおもむくままに……。

### なぜ2人は魅かれあったのか？

なぜ、34歳のフォーニアが、何の根ももたず、1人でこんなひっそりとした生活をしているのか？ また、なぜフォーニアがコールマン教授のような老人(?)に好意を示すのかは、この後の物語の展開を見なければわからないが、やはりフォーニアにも、コールマン教授やネイサンと同じ、あるいは、それを上回るような「失意の過去」があったのだ。

それはさておき、妻を失い、この年となって2度と恋をすることなどないと思っていたコールマン教授だったが、突然目の前に登場した、美しく魅力的な34歳の女性フォーニアに、夢中になっていった。「男の過ちは常にセックス絡み」「住む世界が違いすぎる」と忠告するネイサンに対する、コールマン教授の「たしかに初恋ではない。大恋愛でもない。だが、私の最後の恋だ」という言葉は、実に重みがあり、説得力がある。パイアグラの助けを借りての、フォーニアとのセックスの喜びは、コールマン教授にとっては決して遊びではなく、自分が生きていることを確認できる、何ものにも代え難い、大きな価値だったのだ。

### 誰にも言えない秘密とは……？

コールマン教授の肌は白く、雪のよう。そんなコールマン教授はユダヤ人(?)。若き日の大学に通うコールマン青年(ウェントワース・ミラー)は、学業

の他、ボクシングにも情熱をもやしている、ハンサムで魅力的な男性。そんなコールマン青年は、図書館でステイーナ・ポールソン（ジャシンダ・バレット）に近づき、見事にその日のうちに彼女をゲット！「一生あなたの側にいたい」と言う彼女との結婚を決意したコールマン青年は、遂にステイーナを母親に紹介する日を迎えたが……？

## 家族と「決別」してまで守るべき秘密とは……？

コールマンの肌だけが雪のように白いのは、遺伝子のいたずら（？）のせい。そんな偶然にせよ、父母や兄妹とはちがう「白い肌」を与えられたコールマンは、ある日、遂に白人として生きることを決意。家族を含むすべての過去との決別を決心した。悲しむ母親のミセス・シルク（アンナ・ディーヴァー・スミス）。そして、コールマンのもとを訪れ、「2度と家族の前に顔を見せるな！」と罵る兄。しかし、コールマンにとっては、このように家族と決別してまでも、自分が「カラード（黒人）」であるという事実は、隠し通すべき秘密だったのだ。

## コールマンとフォーニアの仲は？

コールマンとフォーニアとの恋仲（？）は、社会的に認知される安定したものではなく、当然、不確実で不安定なもの。コールマンの心の悩みが人種問題なら、フォーニアのそれは、①義父から受けた虐待による心のキズ、②ベトナム帰還兵の夫レスター・ファーリー（エド・ハリス）の暴力、そして③子供の死というもの。夫レスターからのストーカー行為にさらされながら、フォーニアはつらい日々を何とかコールマンの助けを受けて乗り切っていた。

しかし今日、自らに課していた掟を破って、コールマンの家に泊まってしまったフォーニアは、自己嫌悪にさいなまれた挙げ句、優しく朝のコーヒーを入れてくれるコールマンを罵倒し、外に飛び出してしまった。さあ、どうなるのか、2人の仲は……？

## 重みのあるフォーニアへの告白

映画の冒頭、そして、後半途中の2度にわたって、雪の道を走るコールマンの

車が登場する。その助手席には、体をコールマンに寄せて眠っているフォーニア。そんなコールマンの車を待ちかまえていたように、車を対向側から走らせたフォーニアの夫レスター。これを見て、思わず急ブレーキを踏んだコールマンの車は路外へ飛び出して、横転し、さあ2人は……？ これは、「あの日」の2人のいさかいの後、コールマンの心のキズを理解したフォーニアが、再びコールマンの家を訪れ、「ごめんなさい」と謝ったフォーニアに対して、コールマンが「告白したいことがある」と抱きしめた直後の事件だった……。

## 2人のアカデミー賞俳優の名演技に拍手！

コールマン教授を演ずるアンソニー・ホプキンスは、『羊たちの沈黙』（91年）のハンニバル・レクター博士役で有名だが、その他にも多数の代表作を持つベテラン俳優。1993年に英国の女王から「ナイト」の称号を贈られた彼は、まだまだ引退の2文字は遠いもので、2004年～2005年にも大作の予定が目白押し。そのアンソニー・ホプキンスがこの映画で見せる演技力については、何も言うことなし！

他方、私の大好きなニコール・キッドマンは、この映画では一步引いた「準主役」の立場ながら、複雑な経歴をもつ34歳の女性フォーニアという、奥深い心理描写を要求される役を見事に演じている。いつからこんな「演技派」に成長したのだろうと思うほど、隅から隅まで注意の行き届いた演技はすごい。そして、コールマン教授と出会った最初の日に、チラッと見せるオールヌード姿や、コールマン教授との「絡み」の中でチラチラと見せてくれる肢体は、いつもながらの美しいもの。この映画は、いわば「汚れ役」で通しているため、華やかでドレスアップしたニコール・キッドマンを見ることはできないものの、普段着姿(?)のニコール・キッドマンも十分魅力的！

そして、この映画では、決してセリフは多くはないが、フォーニアの話す言葉は、その1つ1つが刺激的なもので、重みがある。このように、何とも魅力的なニコール・キッドマンと相変わらずの名演技を見せるアンソニー・ホプキンスに大拍手！

2004(平成16)年6月23日記